

はじめに —自分のなり損ない人生を考える

昨年来、マスコミで東京医科大学がもっばらの話題になった。そもそもの出発点は文部科学省のお偉いさんが、息子を裏口入学させるために便宜を図ったことから始まった。そのうち、女子の受験生は一律に減点していたなんてことが発覚。さらに3浪・4浪などの受験生も減点扱いしていたことなども分かってきて、大騒ぎになっている。いずれにしても、当事者にとってはとんでもないことばかりだろうが、私が驚いたのは3浪・4浪なんて受験生が問題になるほど世の中にいるらしいことである。

3浪・4浪するってことは、たった数十年しかない人間の人生にとって3年も4年も無駄にすることであろう。そして、その結果も必ずしもいいものが得られるとは保証されているわけではない。それでも3浪・4浪する人が少なくないということが今回の事件から分かってきて私は、私の人生というか、今までの生き方を改めて考えさせられてしまった。

と言うのは、私の今までの人生は「なり損ない人生」の連続だったと言っていいと思っているからである。何年も何年も目指す道を求めてチャレンジし続けるという生き方は、率直に言ってしてこなかった。目指す道でうまくいかなかったら、違う道、それが全く違う道であっても、新たな道を探して歩き始める…。目指す方向になり損なったら、別の方向を探して新たな生き方を探るという道を歩んできた。まさに、「なり損ない人生」というか、「手探り人生」の繰り返しだったと言っていいであろう。

私は2016年9月に、『リストラ中年奮戦記』という本を出版した。音響メーカー・パイオニアのサラリーマンだった私が50歳の誕生日1か月前にリストラでクビになり、その後、植木屋になり、さらに森林ボランティア、読み語りボランティア等々、ボランティア三昧の日々になっていく姿を描いたものだ。

サラリーマン時代は宣伝部で宣伝の仕事しかしたことのなかった私が、なぜ植木屋などという道を選んだのか？ そして就職した造園会社は、先輩職人は背中にモンモンを背負った人ばかり。ヘルメットの上からとは言え、社長に金づちで頭をたたかれるなんてこともある暴力日常茶飯事の最悪の会社。そうした会社の中で、「一切、言い訳も弁解もしない」と自分に誓いを立てての日々。2年半を経て造園会社を退社し、一人の自営庭師として独立。そうした過程を記録し、さらに森林ボランティアなどボランティア活動との出会いまで書き綴ったものである。読んでいただいた多くの人から、「2冊目を期待しているよ」「続編を待っているよ」という言葉を少なからずいただいた。

ということで、今回書かせていただいたのはパイオニア時代を中心に私の歩いてきた人生。それは、何度も目指していたことになり損なった「なり損ない人生」と言ってもいいであろう。その「なり損ない」を乗り越えてきた、まさに、やさぐれた人生の記録でもある。

(なお、本文中の一部の人名は仮名にさせていただきました)

2019年10月 高木喜久雄